

# 東京バッハ合唱団 月報

[第565号] 2009年7月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604  
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732  
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.565  
July 2009

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 満堂の聴衆とともに 特別演奏会「J. S. Bach 教会音楽の午後」



### 東京バッハ合唱団を初めて聴いて

市川 義和 (荻窪教会員)

東京バッハ合唱団の存在は、以前から耳にしていたが、演奏に直接触れたのは2009年5月17日の午後、第19回荻窪音楽祭の一環として開催された日本キリスト教団荻窪教会での演奏会が初めてであった。

バッハは教会で聴いてこそ、ふさわしいと思っており、また季節も薫風の5月。期待をもって当日を迎えた。合唱団は各パートとも5人程度かと想像していたが、会堂のオルガンの位置から反対側の壁まで横一杯に並ばれた様子に圧倒された。

そして指揮者の大村恵美子さんは指揮台でなく、客席に囲まれた中央通路のところに立って指揮をされた。合唱団とも、さらに客席とも同じレベルで指揮をされていたのが非常に印象的であった。以下に気づいたことを3つほど書かせて頂く。

第一に日本語の歌詞で歌われたこと。専門的には詳しくないが、バッハはやはりドイツ語でという方もあろう。しかし日本語で、さらに心を込めた歌いぶりは聴く者の心に響いてきた。団員の中に何パーセントくらいクリスチャンがいらっしゃるか分からないが、歌詞の意味も良く理解されて歌われていることであろう。

第二に伴奏のこと。オルガンは当然として、そのほかに、ヴァイオリンとヴィオラあたりが伴うのかなと予想していたが、当日はフルートのみであった。しかしオルガンとフルートというのも、カンタータの伴奏にはふさ

### 第19回荻窪音楽祭

5月17日(日)午後3時、荻窪教会

- ・カンタータ第8番 (み神よ わが死はいつ)
- ・宗教歌曲集より  
(ソプラノ独唱 BWV446, 507, 479)
- ・カンタータ第131番 (深みより 主よ われはなれを呼ぶ)
- ・ミサ曲 (キリエ・グロリア BWV235, サンクトゥス BWV232)

光野孝子 (ソプラノ独唱)

若松純子 (フルート)

金澤亜希子 (オルガン)

大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団

[主催]:「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」の会 / 日本キリスト教団荻窪教会

わしいこを改めて認識した。その2つだけでバッハの深さと広がりが豊かに感じられた。

第三に目の不自由な方も団員におられて歌われていたこと。点字の楽譜を手に歌われる姿に感動を覚えた。そうした方を仲間に加えて一緒に歌われている合唱団のありかた、懐の深さを思った。また合唱団に小学生と思われる方がおられたことも驚きの一つであった。

なお、荻窪教会の小海基牧師がテノールの一員として参加されることは事前に全く知らなかったので当日の良い意味の大きなサプライズであった。

今年8月に予定されているというヨーロッパ演奏旅行の成功をお祈りして、この小文を閉じさせて頂く。



写真提供 [左上]小長谷孝之氏, [右下]松尾茂春氏 (大きな背中は小海牧師)

## 穏やかに心に届いた歌声

片山 洋子（荻窪教会員）

パソコンで画像のサイズを自在に変えられるように、この教会も上下左右に大きく広げられたらいいのに...、聴衆はともかく、身動きとれない状態の狭いステージで歌われた団員の方々はさぞご不自由であられたことと思いました。

でも、その狭さゆえ客席の間に入って指揮をなさったので、私たち聴く者も共に神様を讃美する一体感をより深くもつことが出来たのはとても幸いなことでした。

そして、あのすし詰め状態では、普通ならばいわゆる“熱気に包まれた大音響”になると思われるのに、不思議と会堂に見合った歌声が穏やかに心に届き、子供たちも加わった合唱団は、教会での音楽会にまことにふさわしく、また私たち聴衆も一緒に讃美歌を歌う時も与えていただけて、とても感謝に充ちたひと時でした。

最後に、ご多忙な身ゆえ、多分練習をサボりがちだったと推測される我らが敬愛する小海牧師を、臨時団員に加えて下さった皆様の温かな広～いお心に、本人に成り代わりまして（勝手に！）心よりお礼申し上げます。そしてこの夏ドイツへ、良い旅となりますように。

## 歌う側の喜びも味わうことが出来ました

小海 基（荻窪教会牧師）

東京バッハ合唱団の皆さん、5月17日の第19回荻窪音楽祭の演奏ありがとうございました。私たちの礼拝堂が荻窪音楽祭に会場を提供するようになって5年になりますが、これほど多くの方が集まっての演奏会は初めてでした。おそらく220名を超えていたでしょう。しかも非常に熱心な聴衆がおしかけました。帰りがけに熱心に感想を語ってくださる一人ひとりに触れて、荻窪にこんなにもバッハファンがいたことに驚かされました。

私は今回は、合唱団に特別許されて歌う側も経験することが出来ました。もっとも後半は力尽きて声も出ないという情けない状態ではありましたが...

大村恵美子先生の訳詞がとても良いですね。原語に合わせてバッハが音で何かを仕掛けているのが良く伝わってきます。歌うたびに気づかされる何かがあります。こういう経験はよほどドイツ語の堪能な人が、ドイツ語を母国語としている人（でもドイツ人でも現代ドイツ語とバッハの古語では大きな開きがあるらしいですね）でもなければ経験できないと思います。まして今回のカンタータは「死」「罪」といった大変重いテーマなだけに、そしてそれを重苦しく歌わせるメロディーではない意外性もあって、歌いながら考えさせられ、発見に満ちていました。東京バッハ合唱団の皆さんもその辺にはまっている人が多いのだらうなと思いました。

この夏の南ドイツの演奏旅行の成功を祈っています。フライブルク大聖堂は、20年前に私が初めてヨーロッパの大聖堂というものを経験したところです。ああいう大聖堂は天井の高さや、ステンドグラス、彫刻...といったもので圧倒させる仕掛けなのだろうな位の偏見を持って門を潜ったら、そんなことより、響きが外と全然違う空間を生み出していることに驚いた場所です。礼拝堂は響きが大事なのだとつくづく思わされた場所です。あそこで歌えるのはうらやましいし、それこそ人生が変わってしまうほどの経験なのではないかと思っています。

良い旅を祈っています。

## バッハの音楽の波に飲まれて

鈴木 敬子（東京バッハ合唱団員：アルト）

5月17日（日）、第19回荻窪音楽祭に参加して東京バッハ合唱団特別演奏会が開催されました。

小雨まじりのあいにくの天気にもかかわらず、定員90名ほどの教会堂は山のような聴衆で溢れました。

私は今年の9月から入団し、まだまだ練習不足の上、体力の不安もかかえながら、果たしてどうなるかと心配しつつこれに臨みました。ステージ上の立ち詰めも絶対無理と知っていましたから、勝手なお願いとは思いましたが椅子を用意させていただきました。せめて歌うときだけは立って全力を尽くしたいと思ったからです。

私は自分だけが皆さんと同じでないことを少し悲しいとは思いましたが、自分自身が現状を認めなければ、これからはついて行けないと深く心に刻み、この演奏会を迎えました。

ところが金澤さんのオルガンが始まり、大村先生のタクトが振り下ろされた瞬間、私のすべての思いわずらいがバッハの音楽の波に飲まれました。恍惚とした大村先生の指揮を見ていると、普段の練習では決して得られない体験、しかもバッハの音楽のすべてが溢れ出るような波に乗せられ、ただひたすら歌っている団員の声のなかに巻き込まれて行きました。

プログラムの最後に、小海先生の短いご挨拶ののち、集まった全員で讃美歌 心はずませ（「讃美歌21」215）を大合唱しました。このときこの会堂内は、歌と祈りと感謝が大きな喜びとなって、まさにこの世のパラダイスでした。本当にありがとうございました。

光野孝子さんのソプラノ、若松純子さんのフルート、ピアニストである金澤亜希子さんの日増しに上達されるオルガン、プロの演奏家たちならではのすばらしい演奏にも聴衆の皆さんは大満足であった、とその日聴きに来てくださった友人から絶大なおほめの言葉とはげまをいただきました。

いよいよ、これから8月のドイツ行きに向けて私は胸はずませています。

## 独仏国境にそびえる

### ケーニクスブル城

第一次大戦映画の精髓『大いなる幻影』のロケ地

大村 恵美子

同じ映画をくり返し見る余裕のない私が、長い間にわたって数回見たのが『大いなる幻影』です。戦後の混乱の中で、はじめて見てから50年もたった現在でも、各シーンの私の記憶はかなり鮮明で、人間が手にした映画のなかで最高峰のひとつと認めてもよいのではないかと信じているほど、格調の高い、ヒューマンな映画です。

前号(6月)の月報で紹介したフランス・アルザスのワインルートに位置するこの城について、ここでは映画の内容とともにご紹介したいと思います。

ライン川の西岸、フランス領のコルマルからストラズブルに向かって北上するのがアルザスのワインルートですが、その途中の山頂に、高々と威容を現すのがケーニクスブルク(フランス語読みでケーニクスブル Le Haut-Koenigsbourg)です。これが映画『大いなる幻影』La Grande Illusionのロケの舞台となっばっちり出てくるのです。

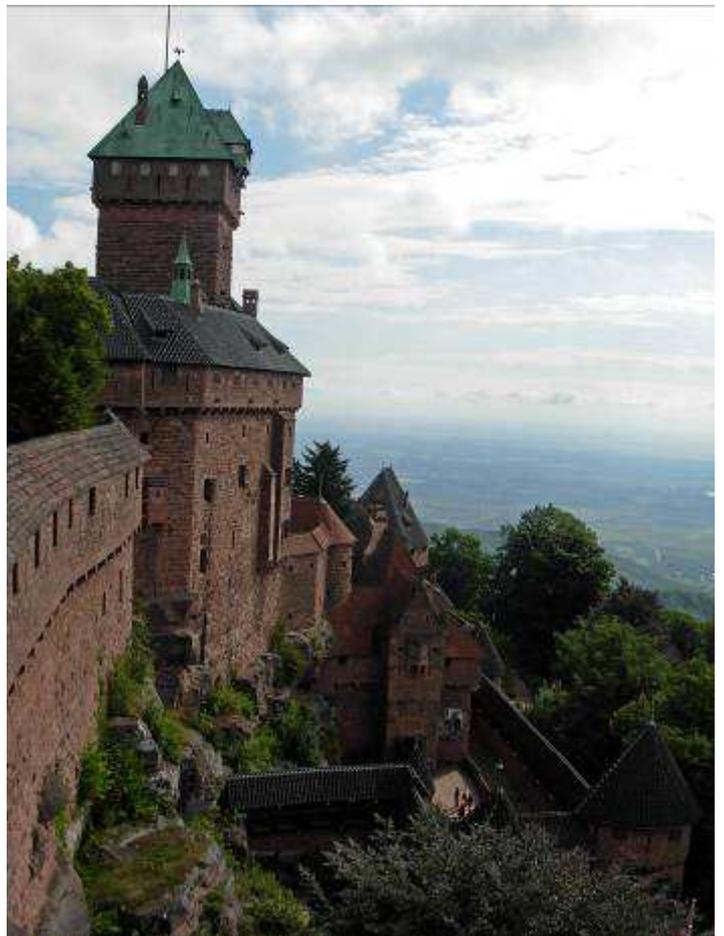
私たちは、来たる8月10日朝、ドイツ領フライブルクを発して、すぐライン川をフランス領に渡り、コルマルでウンターリンデン美術館を訪れ、ついでワインルートを辿って北にストラズブルを目指します。このあたりには、寄りたいたいところが数々あるのですが、時間の制限上、いちばんピトレスクで小ぢんまりとして見学しやすい、リースリングワインの町リックヴィルだけに立ち寄ります。

ケーニクスブル城にも近く、ぜひ登れたらと、下見のときにドライブを試みたのですが、やはり時間もかかり、城内めぐりにも徒歩でかなりの昇降を強いられるので、無理だと判断せざるを得ず、バスの窓からはるかに見上げてゆくことになりました。

この機会に、この城の歴史と、映画の内容とにふれて、今後ぜひ興味をもって見ていただければ、とおすすめしたいのです。

#### 城の歴史

海拔755メートルの山頂に建てられた城は、主要道路が十文字に交差する要衝の近くの山頂に、アルザス一帯をへいげいしている。この山頂は、古くから山賊の首領の隠し砦、根城となっていたが、12世紀にホーエンシュタウフェン家(神聖ローマ帝国)によって城砦が築かれて以来、さまざまな攻防をへて廃墟と化していた。普仏戦争(1870-71)の結果、アルザスがドイツ領となった後、皇帝ウィルヘルム 世の命により、城の再建・修復が指



城の銃眼からアルザス平野を一望する(2008年8月大村撮影)

示されて、今日の威容(15世紀風)をほこるに至っている。第一次大戦をへて1918年、ふたたびフランス領となり、今は居城・軍用城砦ではなく、中世の博物館としてよみがえったのである。

#### 映画『大いなる幻影』のロケ地に

この映画の舞台に登場して一躍、世に知られるようになる。映画が無声からトーキー時代に入って、1930年代、フランスはたてつづけに傑作を輩出して、世界中に轟くような金字塔をうちたてる。その代表的な監督のひとり、印象派画家オーギュスト・ルノワールの次男、ジャン・ルノワールの『大いなる幻影』は、1937年6月封切られ、秋には日本にも輸入されたが、国際的な視点をもち、強い反ナチズムのメッセージを伝えるこの映画は、すぐさま日本国内で公開禁止となる。1938年3月には国家総動員法が公布され、戦時体制に突入という時代。

戦後の国内公開は1949年であるが、これは不完全版で、完全版(1958年制作)が岩波ホールで公開されたのは、やっと1976年になってからである。

しかし、いつ見ても現代・同時代的な感銘にうたれ、第一次大戦がすでにヒトラーナチスの胎芽を内包していたので、第二次大戦にその勢いはそのまま引きつがれ、映画のなかの軍服や町の情景など、時代の視覚的背景の違いはあっても、本質的な働きかけは、どちらの大戦だったか混同しそうになるほど、普遍的な印象をうける。それが強調される要因となっているのが、中世風に再建

されたという、ケーニクスブル城である。

あらすじは、1914年-16年、第一次大戦時の物語。ドイツ将校監督下のこの城が、捕虜収容所となって、フランス、イギリス、アメリカ等、連合軍各国の将校らと生活を共にする。たがいに貴族階級のドイツ将校（収容所長）とフランス将校（捕虜）が、立場を越えて親密な仲となり、労働者階級出身の中尉（ジャン・ギャバン扮する）たちと距離をおく。

やがて集団脱走を執行する時がきて、フランス将校はかれらの企てを知らず自身は加わらなかったが、突如、城壁の堀に上がってフルートを吹き始める。その間に脱走者たちは外の野原に散って行った。しきりの制止も聴かず吹きつけるフランス将校を、収容所長のドイツ将校は仕方なく射撃する。

臨終の床のフランス将校につき添うドイツ将校は、自分が生き甲斐もなく世に長らえることを嘆く。ここまでが、城の中での物語だが、フランス将校の死を賭した援助のおかげで脱出できた中尉たちは、ドイツの民間人の親密なかまを心得、ついにスイス国境を越え、国外脱出に成功する。

このように、いろいろな意味での対立矛盾、敵味方などが、すべて溶け合って、自然と調和しながら、平和な人生へと解決されてゆく。大いなる(グランド)幻影(イリュージョン)とは何か。平和・理想、これが現実のなかでは幻想であっても、人間存在をひき上げてゆくものであり、尊厳を保たしめてくれるものである、ということの意味する。「戦争の終末、平和、は、ことによるとイリュージョンかもしれないが、かりにそうだとすると、じつにグランドな、つまり壮大で高貴な素晴らしいものではないか」(吉村英夫『大いなる幻影考』学陽書房)。

あまりにもこの映画は善意と信頼に貫かれていて、ドイツ人たちも甘く描かれており、リアリティ欠如、超楽天的と批判される。しかし、まさに「(映画の製作された)1937年はフランス人民戦線にとって崩壊の危機の年であり、第二次大戦へと歯止めもきかずなだれ込んでゆく年だったのはたしかで、それゆえにこそ、本物のヒューマニズムで反戦平和をねがうルノワールは、アイディアリズムをリアリズムで描ききる、という課題を自己に課したのである」(吉村英夫、同書)。

私たちはまた、核が全世界を威嚇する時代に立ちすくんでいる。この映画は、現在の私たちを鼓舞してくれる、まったく力強い永遠の指標にちがいない。



絵葉書  
Editions  
ESTEL BLOIS

## 《マタイ受難曲》を中心とした今後の演奏計画 創立 50 周年に向けて

大村 恵美子

8月のヨーロッパ演奏旅行が無事実現したあと、12月には世田谷中央教会での特別演奏会(12月5日)が催されることまで、前号月報(564号、6月号)でお知らせしました。

来年からは、従来どおり春・冬の年2回の定期演奏会を続けられることが望ましいのですが、世相もかわり、国の経済情勢の見通しも不明で、この小さな私たちの合唱団も、既定の路線をいつまでも貫けるのかどうか、わかりません。

けれども、“創立50周年(2012年)にふたたび《マタイ受難曲》を”という、一昨年3月の《マタイ》直後の意欲と、それにつづいて、《口短調》《ヨハネ》など他の大曲も、《マタイ》をはさんだ前後3年間で連続上演したい、という団員たちの野心的な立案は、いちおう掲げておきたいと思います。

それからさらに、主宰者の本音である、全カンタータの紹介実現という、執拗な願望を、創立記念企画の終了後の2014年のプログラムとして付け加えておきます。さいわいにも、創立以来47年の長きにわたって、当合唱団の演奏活動は、ゆるぎなく実現されてきたのですが、今後それがどうなってゆくのか、目がはなせないところです。現在の予定をリストアップしておきます。

創立記念企画(2011-2013年)を含む5年間の予定

2010年	春	104 定期	カンタータ 17, 52, 124, 4
	冬	105 定期	カンタータ 111, 71, 170(?), 列・朽
2011年	春	106 定期	ヨハネ受難曲
	冬	107 定期	クリスマス・オトリオ - , モテット(?)
2012年	春	108 定期	マタイ受難曲
	冬	109 定期	クリスマス・オトリオ - , モテット(?)
2013年	春	なし	
	冬	110 定期	口短調ミサ曲
2014年	春	111 定期	カンタータ 125, 199, 85, 76
	冬	112 定期	カンタータ 64, 190, 196, 170(?)

2007年の《マタイ受難曲》で、児童合唱を歌った方々数人が私たちの合唱団に入団し、おとなに伍してりっぱにつづけていらっしゃることは、将来への限りない希望を抱かせてくれます。

もう一步。あなたのコインで、演奏旅行に送り出してください。

2009年5月31日現在

【ヨーロッパ演奏旅行募金】 2,248,600円(目標 300万円)